



新潟県租税教育推進協議会長賞 佳作

『ふるさと納税で地域を応援、の新定義』

新潟県立三条高等学校

一年

小出 こいで
匠馬 たくま

私の父の誕生日は決まって鰻をみんなで食べる。私は魚より肉を食べたい派の人間だが鰻は魚にも関わらず好きな食べ物ランキングの上位の方に属するのだ。鬼に金棒。鰻にご飯。ところで、私が今よりも幼かったころはスーパーマーケットで買った鰻をご飯に乗せて食べていたが、今日の鰻はどうも違うらしい。今日の前に湯気を立てて、でんと構えるこいつは鹿児島県から来たらしいのだ。どうやってそれを手に入れたのか。ふるさと納税。納税といえばちようど税の作文が宿題に出ていたのだ。今回の作文はそれについて書こうと思う。

今CMなどでもよく耳にするふるさと納税について親に聞いたリインターネットを調べてみると、ふるさと納税は大変便利で素晴らしい取り組みであるということが分かった。そもそも、その仕組みとして私たちが応援したい自治体に指定された金額を入金すると私たちは次年度の住民税を手数料二千円を除いた額分、免除されるという。しかもそのお礼としてその自治体の特産

品や名物が返礼品として贈られるのだ。そして入金したお金はその自治体のイベントや建物などの整備費として活用されるのだ。私たちがとっても寄付を受けた自治体にとってもWINWINであることが分かり、私も将来は絶対やってみたいな、と思った。私の住む新潟県もふるさと納税によって支えられている地域の一つだ。燕市ではなんと全体二十位の寄付金額を集めていて、そのお金が市民の生活を大きく支えている。「住民税が都心へ集まり地方の過疎化が進行する」なんて事態を防いでくれるこのふるさと納税はまさに救いの手である。そしてその救いの手をもぎ取ろうと他の自治体は魅力発信に一層努める。ここで競争が生じる。これによって地域がどんどん活性化する。素晴らしい循環だなど、私が言う聞いていた父はそこに問題があるというのだ。調べてみると二つの問題点が分かった。一つ目は逆に都市にお金が集まらなくなるということだ。横浜市では二百五十億を超える流出が起きている。二つ目は競争に勝とうとするあまり、その返礼品に費用をかけすぎてしまうということだ。これでは本末転倒である。そこで隠れ経費込みで寄付額の5割に抑えるなどルールを変えたところ、一部の品が廃止になったり工夫の幅が狭まり返礼品の質が落ちてしまうということが起きたのだ。改めて鰻に想いを馳せる。この鰻は鹿児島県の方々の工夫の結晶なのだ。ふるさと納税による寄付金の格差。私たちにできることはなんだろう。集まる寄付金の少ない地域に納税してあげる。これが新たなふるさと納税の「応援」の定義なのではないか。まずはこういった影響が出ているということのみなが知り、ふるさと納税の恩恵を受けている自治体もいっしょに応援できれば地域はもっともっとよくなると思う。

